小泉八雲のことども（続き）

根　本　重　熙

在熊時代のハーンを追体験の行脚続く。

熊本第五高等中学校での，ハーンとその一生徒との問答。

1894年（明治27年）6月4日。彼は例のチェンバレン教授に次のように書き送っている。

折折，美わしい魂をもった，真面目な愉快なある男・天保老人（筆書注：秋月胤永先生。同校漢文の教師。当時，講師として時時出講していた）がここへ下ってきて講義をします。この老人はその青年たちに，彼らの国の未来のことについて述べます。古代の精神の衰廃を嘆き，西洋の風習，宗教，実務の方法が，善良な風俗を乱す力を持っていることを悲しみます。青年たちの祖先のことを彼らに思い出させます。忠君と名誉心とについて彼らに述べます。そしてその青年たちは善良でありますから，その心は一ばいになり，冷静さがその国の風でありながら，何物かが彼らの眼を輝かせます。ところで，そうした後の，彼らの思想はどうでありましょうか。前にお話し申し上げたことのある珍しい生徒・安河内麻吉との会話で，この間の著しい例を一つ得ましたので，それをここに写しましょう。

『先生。あなたが初めて日本においでになった時，昔風の日本人についてのご意見はどうでありましたか。どうか私に腹蔵なく仰て下さい』　『君は秋月さんのような老人のことを言うのかね』　『そうです』　『うん。私はそういう人を神神しいと――神様だと――思った。そして私は今，新しい時代を見たから，そういう人を一層神神しく思うね』　『秋月は理想的な昔のサムライの典型であります。しかし，先生は外国人として屹度欠点をお認めになっているに相違ありません』　『どうして，欠点？』　『あなたの西洋の見地からしてです』　『私の西洋的見地というのは哲学的なもの，または倫理的なものだ。一体，ある国民の完全ということは，その人たちが属している特別な社会形式に，完全に適合しているということを意味するものだ。そういう見地から判断すれば，秋月さん型の人は，私がこれまで逢ったことがあるどんな西洋の標準型の人よりも完全であった。倫理的にも同一のことを私は言い得る』　『しかし，西洋の型の社会ではそんな人間は大きな役を演じることができましょうか』　『その，人手を借りないでの，努力によってというのかね』　『そうです』　『できない。そういう人には実務の能力がないし，また，ある種の結合に対しての才能がない』　『如何にもご尤もです。それで，そういう人の善良というのは，どういう点に存しているとお考えになりますか』　『廉恥，忠君，礼義において，この上なしの克巳，利己的でないこと更に他人の権利の尊重において，自己を犠牲にすることの迅速なることにおいて』　『それもまた真実です。しかし，西洋の生活で，そういう性質は成功を博

するのに十分なものですか』　『いや，そうではない』　『ところが東洋の道徳はそういう性質を修養しました。そしてその修養の結果は全体のために自己を抑(おさ)えることでした』　『そうだ』『これに反して，西洋の社会形式は，利己を，また競争を，利益を得る努力を，それにそのような一切のことを奨励して自己を発展させます。そうではありませんか』　『そうだ』　『それで，日本は，世界の国民の間にその地位を保って行くためには，仕事をし，工業を，また商業を行うのに西洋式にしなければなりません。そうでしょう』　『多分ね』　『〝多分〟ということではないと思います。〝必ず〟だと思います。私たちの未来は工業的，商業的でなければなりませんから，工業，商業，銀行，株式会社をもたなければなりません。万事西洋式にしなければなりません。昔風に物事をしようとすれば，いつまでも貧乏で弱いままでいなければなりません。また商売取引のたびごとに一番ひどい目にあうでありましょう』　『そうだ』　『それだからです。どうして私たちはどんな仕事でもすることができましょうか。どんな企てでも試みることができ，どんな大制度でも立てることができ，どんな事業でも大規模にできるというのでしょうか。もし私たちが昔どおりの道徳で暮らしていけばのことです』　『どうして？』　『どうしてといって，もし私たちが，誰か他人を害してはじめて自分の利益に都合が好いことを行うことができるという場合に，旧道徳に従っていればそれができません』　『そうだ』　『しかし，西洋式に仕事をするためには，そのような狐疑逡巡に妨げられていてはいけません。他の誰かが害を受けるであろうからといって，そのために利益を得ることをためらう者は失敗するでしょう』　『常に必ずしもそうではない』　『競争に何の拘束もない場合においては，それが一般の法則に相違ありません。一番利口(りこう)で一番強い者が成功します。弱い者愚かな者は失敗します。それが自然の法則です。生存競争です。西洋の競争は自分の同胞を愛する念に基づいているのですか』　『いや，そうではない』　『先生。旧道徳はどんなによいものであっても，そんな道徳律に従っていては，私たちの国家の独立を保ち，何らかの進歩を達成するということは不可能であるというのが真理なのです。私たちは道徳に代えるに法律をもってしようと努めなければなりません』　『それは悪い代替物だ』　『それはイギリスでは悪い代替物ではありません。それにまた，結局人類は，法律の力によって，感情のそれによってではなく，道理の上で道徳的になることを知るに至るでありましょう。私たちは過去を棄てなければなりません』　それで，私は，何も言うことができませんでした。と。

又この問答を同年同月某日，彼は，アメリカにいる親友ヘンドリックにも通信している。

なおまた，彼は，同年5月16日。同教授に宛て，『素敵によくできる学生たちがこの夏東京へ行きますが，あなたはもう授業をなさらぬから，彼らにお会いにはならないでしょうが一人の名をあげたいと思います。安河内麻吉です。私は3年間教えました。これまでに会った日本の生徒のなかで一番立派です。平民ではありますが福岡の殿様の庇護を受けているので多分洋行させられるでしょう。私は，このように言うのは遺憾に思いますが，彼は法律を研究しています。しかし，それへの特別な立派な才能をもっていますから正しいことです。非常にしっかりした性格で実際

的で真直で，大きく，徹底的で。彼はえらい人間になるだろうと思います。英語に一番であるばかりでなく，どの科目においても容易に一番になります。そして普通の生徒とは全く異って，教師をば，横着な海綿へ徐々に注いで空にされる知識の瓶としてではなく，他人の助力を借りないでのその勉強へのただの補助と考えています。その同窓の川淵というのは，それほどにはしっかりしていませんが，殆んど同程度に利発です。本当に立派な頭脳の所有者が，いつも法律を専門にすることは実に残念だと思います。理科にはこんな青年は一人もいません。みんな非常に凡庸であります。と。

彼は，愛弟子の一人である大谷正信に，その生徒が言語学を専攻したいと思うが先生はどう思われますか，と質問したのに対する返答であると思われる書信に述べて言う。『後年そんな研究の実際上の価値は何か。君は言語学の教授になろうと思っているのか。君は一生を諸国語の科学的研究に捧げようと思っているのか。もしそうなら，それに要する特殊の才能を君は持っていると確信しているのか。というのは，記憶せよ。誰れでもが言語学者になるわけにいかないのは，誰れもが数学者になるわけにいかないのと同じである。実は私は君に充分に助言を与えることが出来るほどには，君の事情，意志，学力などを知っていない。ただ，私が思うことを一般的に君に話すことが出来るだけである。

君は後年君に実際に役に立たぬようなものを勉強すべきではないと，私は思う。私は，生徒が工学を，建築を，（医学に要する特殊の道徳的性格をもっているなら）医学を，或は応用科学のどんな分野でも勉強するのを耳にすることをいつも喜ぶ。立派な生徒がみんな，科学或は工学の研究に向かわないで，法律の研究に向かうのを見ることを好まぬ。言うまでもなく数学的能力如何によるところが多いが。私は，君の勉強の全部を科学的専門業の方へ，何か真実に実際的なものに，工学なり，建築，電気学，化学なりに向けられんことを切に君に忠告する。そのうち何れをと君が尋ねるなら，私は君に言うことは出来ない。そんな方面への君の最高の才能を私は知らないからである。『実際の専門業として君が好きだと一番確信するものであればどれでも』と私は言うだけのことである。日本には今もはや法律家は必要でない。そして文学とか，物を教えるという職業は前途の望みが少ないと私は思う。日本が求めるものは科学者である。そして日本は，年ごとに層一層多くそれを求めるであろう。今日は君は幸福である。だがこの世界には確実なものとては何一つありはしない。君が突然に，他の助けを借りないで，自分一人の金を造る力に全く頼らなければならないようになったと仮定して見よ。そうしたら何か実際的なことをするのが必要ではなかろうか。確にそうであろう。ところが君の才能が稀有のものであればあるほどそれに応じて，その受ける報酬は，君の金を造る力は大きいだろう。英国の女王すらその子供たちに専門業を覚えるようにされた。

ところで，科学者は今なお日本では比較的に稀である。分科大学での科学専攻の学生は少ない。その研究を始める学生は多い。しかしそれが，むずかしいとて放棄する。がしかし正しくそれがむずかしいからこそ，それは重要であり，それに通達する人は非常な高い価値をもつのである。

君がもし私の子か弟なら，私は，『科学を，応用科学を勉強せよ。実際的な専門を勉強せよ』と君に言うであろう。言語とか他のことは，君が好きな時にいつでも勉強が出来る。実際的な知識が今唯一の重要な知識である。そして君の全生涯は君の現在の勉強如何によるのである。(以下省略)と。しかしながら，この愛弟子は，以上のような情理をつくした恩師の哀願に従わなかった。彼はそこで直ちに書き送っていう，『私は君が科学の方の科目を取らなかったことを真実遺憾に思う。文学は学校外で最もよく研究できる科目である。だが科学はそうではない。科学的な専門業は君の国のために，君をして大なることをなさしめようし，とにかく，君をして実際上独立ならしめ得るであろう。だが文学は君にとって一つの楽しみ以上のものになろうとは自分には思われない。英国ですら，文学で生活することは，或は文学で名を成すことは，極めて困難である。しかし私は，この問題について私が言えるだけのことは前に述べた。そして恐らくは君自身の利害がどうであるかは，君の方が私よりもよく知っているだろう』と。

思えば，ハーンという人は，実(げ)に不思議な人格ではある。彼自身は文学の教師であるにも拘わらず，その弟子たちには，それとは正反対の進路指導を試みて倦(う)むことがなかった。彼についての一般的な理解である，"古い日本を謳歌した懐古趣味の人"，"怪談の蒐集愛好家"，"西欧的近代からの脱走者"，"ロマンチックな放浪者"，"異国趣味の好事家(こうずか)" 等等のイメージと，その教子(おしえご)たちに実際的な科目を取るように力説してやまない彼とが，その一身においてどこで，どのような調和をなし得ているというのであろうか。ある論者は，ハーンを目して一個のパラノイアであると規定しているのも彼のこのような矛盾撞着，複雑にして多面的な人間像が，そのように見得る絶望的な様相を露呈してもいるということであろう。

教師ハーンの立往生(たちおうじょう)的沈黙。

上述の，ハーンと彼の生徒との間に展開された充実した，授業時間中の"脱線的"問答において，ハーンが生徒の鋭鋒の前に屈伏したというのではないようである。当然のことながら，チェンバレン教授や，ヘンドリックに対して，態態(わざわざ)自己の敗北の顚末(てんまつ)を通信したのではない。安河内の立論の展開ぶりを親友たちにも知ってもらいたかった。また，自分が"珍しい生徒"をもっていることに満足し，密(ひそか)に誇をさえ感じていたのではなかろうかと思われる。ハーンは"その人が所属している特別な社会形式"と言っているが，生活形態の総体を文化という言葉で表現すれば，先の彼の語は文化と言い替えてもよいであろう。秋月老のようにその文化に完全に適合し，その文化を彼の一身に具現している人物が，完全な人間というものであり，秋月老はその文化に適合している程度が，ハーンが，これまでに遇(あ)ったどの西洋人の文化体現者よりも，遙かに勝(すぐ)れて，完全であり，殆んど人間業(わざ)とも思われない程であるからとて，神様だ，神神(こうごう)しいと思うと述べたのであり，以上の観点に立つ以上，その人の実務能力の有無というが如きことは問題ではない（もちろん有能である方がよいが)。有能と言い，無能と称するも，それは，その人の一つの才能的な属性に過ぎない。その一属性なるものをもって，その人の全人的評価を下す試みなどは，正(まさ)しく神を恐れない振舞(ふるまい)であり，同時に人間存在への冒瀆と言ってもよいであろう。有能無能に拘わら

ず，自らの努力によって，ある崇高な境地に到達し得た人は，いつでも尊敬すべきものであり，当然高い評価を受けるべきである。というのがハーンの立場であると思われる。

一方，生徒の立論の立場は，日本が，世界の国民（その中で有力なものは全て西洋的産業主義をば採用しているのであるが）の中に立ち交(まじわ)っては，日本もまた西洋式のそれを採用しなければ国際場裡でその存在を主張し得ないのだからという功利主義的見地に立つものであり，その限りにおいては，生徒の説は全くの正論であり，ハーンとしても，論駁の余地のないものであるとしてそれを認めたものである。両者の立場は，別別の次元に属するものであるからとて，一応勝負(かちまけ)なしの引き分けに持ち込んだものと筆者は考える。

余談ながら，ハーンはヘンドリック宛の手紙では，上述の問答の後に，『日本の学生としては実に堂堂たる主張ではありませんか』とその生徒に向い讃詞を呈している。『日本の学生としては』というのは，ハーン先生（中学，高等学校，大学で日本人の学生に接した）は日本の学校の教育制度や学生の勤勉さ，教師と学生の間の人間関係については賞賛している反面で，学生の独創性の欠如は絶えざる不満の原因であった．また，自分が彼等にそれをもたせることができない非力さを歎いている。そのことが，上記の言の背後にあると思う。独創性云云については，ただ単に学生には限らないから，そのことは，超密集居住の農耕民族としての，民族的規模での特性かも知れない。隣人のやり方に倣(なら)っては，播種(はしゅ)，除草，施肥，刈入をしてきたのである。

ハーンは，熊本第五高等中学校の同窓会"竜南会"に依頼されて一場の講演を行った。竜南会雑誌第28号にその草稿がのせられた。1894年（明治27年）1月30日。同教授に宛て，書いている。『土曜日に，私は依頼に応じて『極東の将来』と題して演説を試みた。生徒はそれを印刷に付する考えらしい。私は，松江における演説の印刷を，一つも貴君に送ったことはなかった。それは全く貴君にとっては陳腐な説に過ぎなかった。しかし，今回のものが印刷されたなら，貴君へ送ろうと思う。それは西洋の野蛮人の侵入に関しての一種の哲学的歴史，ピアスン氏の意見に関する補遺であるから』と。その演説は1894年（明治27年）1月27日。熊本第五高等中学校の瑞邦館（筆者注：この瑞邦館については彼の著書"Out of the East"（東の国から）の記述によると次の様になる。"官立高等学校の校庭に，他の校舎とは，一際(ひときわ)建方が異った建物が一つある。この建物は，紙の代りに，ガラスをはめた障子(しょうじ)が入れてあることを除けば，あとは，純日本風の建物だといってもさしつかえない。間口も広く，奥行もふかい，一階建てで，中は，大変に広い。百畳敷きの部屋(へや)がひと間だけである。"瑞邦館"とは"清らかな国の大広間"という意味だ。その名前を漢字であらはしたものが，皇族の一親王によって，玄関の上の小さな額に書かれている。云云……"）において行われた。

講演「極東の将来」（梗概）

現在と関係して将来の事を考えるのは，文明に欠くべからざる事である。文明国における如何にありふれた労働者といえども，このことはする。儲(もう)けるや否や，その金の全部は消費しないで，賢い人ならば，その大部分を将来のために用意として貯えて置く。これは最も普通の種類の用心

であって，政治家は，もっと高次の用心をする。彼はある法律案を提出又はこれに反対する時"自分が死んでから百年にもなったら，この法律の結果はどうなるだろう"と考える。しかし，哲学者はもっと進んで用心する。彼は"今から千年もたったら，現在はどんな結果になるだろう"と問う。そして彼は，ただ一国に限らず，全人類について考える。東洋の将来について諸君に語る場合に私は西洋の哲学者の立脚地から語りたい。すなわち，日本ばかりでなく，極東ばかりでなく，全人類について語りたい。ということである。

私は，極東の将来は，一部分は極西の行動に左右されることを言わねばならない。この一事はたしかである。すなわち，極東で起る大変化は西洋の影響によって起るということである。この影響とは侵略である。それは止むを得ない。それは数代の間止むことはない。将来の東洋について考える前に，現在の西洋について考えて見よう。この世紀の西洋の産業文明の進歩に関係した最も著しい事実は，西洋諸国民の非常な人口増加である。(欧州各国の人口増加を数字で示し，具体的に述べている。)その原因は，一部分は産業と科学の進歩，又一部分は生命の保持，健康維持の方法の進歩によるものである。しかし，農業の改良，衛生上の発見，科学や産業上の発明だけでは，それを十分に説明することはできない。

実際西洋は今日，自らを養うことができない。地球のどの部分でも欧州へ食料を送る。その方法は商業，快速力の汽船，速い交通機関，新植民地の獲得等であり，西洋はその必要に迫(せま)られて，全ての国に自分の生存を助けさせるようにしている。欧州の産業的文明は世界中に拡がり，その圧力を今日シナと日本の海岸が感じつつある。

西洋は人口増加を移民によって解決しようとする。しかし，その結果を免れる程に速やかには移住できない。競争は激化し生活を更に困難にする。西洋の長所でありまた弱点でもある進歩はこのことが説明する。進歩するのは止むを得ないからである。労力なくして生きていける国国では全然進歩はしない。科学，芸術，産業における発明――世界をとりまく電信，無数の鉄道，機械の完成に対する数学の応用等――は生活の必要の結果即ち何か食物を得ようということの結果である。すべての種類の進歩の原動力は飢餓(きが)であるのだ。実にこれが永久の法則である。西洋人は自然的障害物を発見した。熱帯地方がそれである。その気候は彼等を殺すからである。移住可能な場所ではそこの住民を根絶した。アメリカからアメリカインディアン，太平洋諸島からマオリ人，オーストラリヤから黒オーストラリヤ人というように。

西洋の産業主義が極東――シナ――に達した時，自然の障害ではなく知力というもので妨害されることになった。シナを破壊することも改造することもできなかった。シナとは通商貿易することができただけである。シナ人は西洋人と，対等であるどころか甚だ危険な競争者であることが判明した。西洋がシナに開港をするように強いた後，シナ人は，南北アメリカの太平洋岸，西印度，オーストラリヤ，ジャワに移住し始めた。最初にその危険を感じたのはアメリカ，ついで，オーストラリヤとジャワで，ジャワの気候はヨーロッパ人には不適当であるので，オランダ人は，シナ人の移住をゆるしている。

シナ人が西洋と，この通りに競争できるのは何故か。一部は彼等の知力。さらに大きな理由はその異常な節約生活である。少なくとも西洋人よりも10倍も安価な生活になれているのでどんなに資本の優勝者でも打ち勝つことができない経済的長所をもっていることになる。職人としても比類がない。欧州の職人がする仕事は何でも彼等はできる。しかも半額以下でできる。もしシナ人が，西洋の産業と機械と科学知識を用いることになったら西洋にとって重大なことになる。それよりももっと大きな意味がある。西洋の人口が二倍三倍四倍と発展していた間は，東洋は静止していたが，前者が後者の門を強いて開こうとした時に，無限の，殆んど不測の活動的勢力が動き出した。東洋もまた発展し始めたのである。その発展に西洋の機械を採用すれば西洋は50年前には夢にも思わなかった危険に直面することになる。西洋にとって好都合なことは，シナの動きが徐徐であること。シナは西洋の産業方法と機械をまだあまり採用していない。しかし，シナは結局西洋の科学と産業を採用するようになることは全く確かである。それが最大の危険であろう。人類の将来が決定されるのは戦争によるのではない。それは産業と科学の競争によるのである。

しかし，商業的種類の知力は最高のそれではない。最高の知力は科学的の知力である。シナはこの方面の才能の証拠をまだ示していない。東洋の人種でそれを示したものがある。日本である。日本は知力的進歩の最高の部門において西洋と競争できることを証明している。私は日本人が商人としてシナ人と同等であるとは考えない。しかし他の点ではもっと高等な種類の人種である。私は国民的感情に詔らうようなことを言っていると思われたくない。日本が知力の最高の場所で西洋と競争できる証拠を示したと私が言ったのは，現在の日本の知力的水平線が英国やフランスにおけるものと同じだという意味ではない。そうではない。ドイツ，アメリカその他の外国において科学研究中の日本の学生がおさめた成功は，最も高い才能がそこにあることを証明するのに十分であった。それは，まだ大部分潜在的，未発達であると言える。しかし，その発達は時間の問題である。そしてその時は遠くはないであろう。それ故シナと日本とは一緒に東洋を代表して，商業においてまた人種間の知力の戦闘において，西洋と競争できることを示したのである。

私が説きたい点は能力だけではない。必要性も同じく重要である。日本もシナも自己防禦のために西洋と競争せねばならぬ。その結果はどうであろう。産業上の発展は東西両洋で続くに相違ない。両洋の人口は増加する。世界は一定数の人口（多分20～30億）しか支え得ない。生存競争が続き，その激化につれて全世界を所有しようとする競争になるに違いない。弱い人種は敗退するに違いない。どう敗退するか。地球の面から消滅する。どちらが敗退するだろう。極東か極西か。それは経済の問題だ。経済がそれに答えるだろう。

二つの人種の競争では知力のある方が勝つ。無学な人種を亡ぼしてそれに取って代る。匹敵した人種の間では一致共同であろう。二つの人種が知力で対等であるが，忍耐力と経済的才能が非常に異る場合には，忍耐力強く倹約な人が勝つに相違ない。諸君がエンジンを一つ買うとする。同じ馬力の二つの中では，石炭を少ししか要しない方を買う。全ての進歩は食物の問題から起ることを私たちは見た。人間の体も一つのエンジンで，それを動かす燃料は食物である。食物を得

る困難さが全ての努力の原因である。西洋人と東洋人の二つの体（エンジン）が全く同分量の仕事をすることができるとすれば，その二つの比較の価値はその燃料の価できまる。英人一人の生活のためには，七八人の東洋人を支える程の物が必要である。絶対的必要品のことを言っても。必要品だけでなく，生活費全体ならば，国によっては二十，三十，五十倍である。西洋のどの種族でも，極東の数百万が生活するような条件では全然生活することができない。ただ現在の習慣の結果によるばかりではない。絶対に必要なのである。鷹を米で養なうことも，狼を藁で養うこともできないように西洋の人人を東洋の食物で生かしておくことは不可能である。

食物は第一に考慮すべきものであるが，それだけではない。異なった人種は，異った安楽，異った条件を必要とする。西洋の人種は，高価な栄養のほかに，高価な安楽を必要とする。彼等はいつでも，全ての時代に，それを必要とした。その理由は生理学的のみではない。心理学的でもある。精神的幸福に必要な条件を奪われたら，西洋人は衰弱してしまう。人口は減少し，努力は殆んど止まる。生物学で，諸君は，消滅した動物のことについて読んだことがある。昔この地球に驚くべき動物がいて，何等敵を恐れる必要がないほど強く，寒さ暑さ或は渇きによって亡ぼされることのないような幸福な境遇にいたのである。この中には，ただ彼等の生存が〝高価〟であったために消滅したものがあることは全く確かである。地球が，彼等を支えることができない時が来たのである。肉体だけについていえば，人間も動物の運命に遇いそうである。或人種は，その生活費が余りに高いということだけで消滅しそうである。

たしかに，西洋と東洋の間の将来の競争においては，最も忍耐力が強く，最も倹約な，最も質素な習慣の種族が，勝利を得るであろう。

最後に，私は日本の貧乏は，その強さであるという，私の固い信仰を述べたい。富は将来において，劣弱の源となることがある。諸君が〝貧乏〟という言葉を好まないとすれば，欧州において最も貧乏な国は，ロシヤであること。しかもロシヤは余りに強いので，全世界が，ロシヤを恐れていることを思って見ればよい。

私はまた，将来は，極西ではなく，極東の味方であると信ずる。少なくとも，シナの関係している所では，そう信じる。日本の場合は，危険の可能性がある。古い質素な，健全な，自然な，真面目な生活法を棄てる危険があると私は思う。日本は，その質素なところを保存している間は強いが，舶来の贅沢観念を採用すれば弱くなる。と私は思う。極東の賢人・孔子，孟子，それから，仏教を開いた人，みなことごとく贅沢をさけ，そして，普通の安楽と知的娯楽に必要なものとで，満足することが，国民の強さと，幸福のために必要である理由を説いた。その考えは，やはり，今日の西洋の思想家の思想である。

さて，諸君に，このようなこと。———私自身の考えばかりでなく，私よりも賢い，よい人人の考え———を述べてみているうちに，私は，いわゆる〝九州魂〟といわれるもののことを考えた。私は質素な習慣と，正直な生活は，昔から，熊本の美徳である。ということを聞いている。それなら，私は，日本の将来が偉大になれるかどうかは，その九州魂或は熊本魂，すなわち，質

素な善良な，単純なものを愛して，生活の無用な奢侈贅沢を憎む心を保存すること如何による。と考えるのである。と。

筆者注：昭和39年１月，五高創立七十五周年事業会の手で，この講演の最後の部分「日本の将来…による」を原文で刻んだ記念碑が，熊本大学法文学部の構内に立てられている。次の通り。

THE FUTURE GREATNESS OF JAPAN WILL DEPEND ON THE PRESERVATION OF THAT KYUSHU OR KUMAMOTO SPIRIT——THE LOVE OF WHAT IS PLAIN AND GOOD AND SIMPLE AND THE HATRED OF USELESS LUXURY AND EXTRAVAGANCE IN LIFE. January 27, 1894.

『将来は極西ではなく極東の味方論』について。（チェンバレン教授への書簡を基底に置きつつ）。1893年（明治26年）４月28日。

一つの大胆な思いつきが，はっきり，強く，西洋と東洋の将来に関する私の考えを悉(ことごと)く押しのけて，私の心に見える形をとっています。恐らく，私はいつかそれを敢(あえ)て発表するかもしれません。しかし，それは骨の折れる仕事です。どの論拠に対しても，科学的な記録を与えなければならないから。それはこういう訳です。西洋の，大きな頭脳で，神経的にもっと複雑な種族は，東洋の種族に結局負けるに相違ないということ。それから，キリスト教およびその文化が，消滅したあとでも，仏教はどういう形かで，生存するということです。その議論は先ず，たとえば，社会学的の目的のために，同じような効果があるシナ人の独居の将来の価と比べると，西洋のそれは，非常に価がかかるということに根拠を置かねばならない。非常に複雑な動物の巨大な種族が，もう既に世界から消滅したのは，単に，彼等が非常に金がかかる（筆者注：食物など，ものを大量に消費する贅沢を意味するであろう）構造をもっていたからでした。機械の進化は，力の節約と，費用のそれの問題を，平行して研究すべきことを教えています。それから，純然たる自然の，しかし同じように，有効な条件と相反して，考慮すべき人工的な条件もある。勿論種族生存の問題は，適者生存の問題です。しかし，私たちは（君がそうあって欲しいように暗示されましたが）適者でしょうか。適者の生活とは，それ自身の力を，内部的に調整して，それに敵意をもつ，全ての外界の勢力に対抗することができる生活のことです。私たちは，それをすることが最もよくできるでしょうか。私の考えでは，今は私たちはできる。しかし，ただ，自然の力に反する人工的方法を利用してできています。私たちは知力的な狡猾さによって，これをやっています。しかし，その知力的な力は，ただ甚だ少数の人にしか属さないぐらい，非常な高い価をもってしてだけ得られるのです。価が無限に小さい，自然と，習慣によって生存および思考ができる，選ばれた人種に対して，同一の力を与えてみた場合，競争において，私たちはどうなることでしょうか。全く駄目どころではありません。国民的発展の力なるものは，攻撃的な力で甚だ高価な力です。しかし，それは私たちの力の最高のものをあらわさない。私たちの力の最高のものは，自己保存および種族闘争には，何の役にも立たず，意味もなしません。そして，私たちの種族の攻撃力は，私たちが，"劣等"だとか，"半開"だとか言っている国民によって，無雑作に模倣され，

覚えられる。しかし，それは，君を退屈させるのに，もう十分でしょう。私は，ただ意味の筋書きを暗示するだけです。その場合には，もし事情が許せば，日本は，シナと，将来を共にすべきです。佛陀は，とにかく，安全でしょう。と。

同年9月16日。

ピヤスンの書物は，大問題となったようです。ずっと以前に君に，手紙で申し上げたように，私も何年間か，ピヤスンが達したと同じ結論に達しそうな傾向をもっていましたが，私は異った方法で到達したのです。熱帯地方における私の生活は，私に，熱帯生活は，白色人種にとってはどんなものであるかということを教えました。アメリカは，私に，シナ人の恐るべき性格について教えました。そして，西洋の個人にとって，現在の文明が，非常に高い値段になること。について教えました。

私は，白色人種が，その知識を東洋に教えた後に，最後には消滅することは，なお，魚竜やその他の不思議な動物が，単に彼等の構造の費用のために消滅したのと同じであると考えます。英人の生活費が，東洋人のそれの約二十倍もかかり，そして，精神的能力と勢力における両者の相違は，両者の生活費の相違とは，決して相伴うものではないという事実に，何だか気味がわるいところがあります。私はピヤスンを注文しました。あの批評家は余程興味があります。宗教家は，この場合に〝神〟を，一つの要素として，考えの中へ入れないからと言って非難します。唯心論は，ある意味から言えば，確に，道徳的美的発達を促すことになる。しかし，ただの生存競争には，道徳的美的発達は，要素として考えられません。私たちが〝虐殺の法則は発達の法則である〟という恐るべき真理を認めねばならない間は。と。

更に同年11月23日。

〝シナ人の海外移住と風土馴化には限度がある〟との貴説は，もし十分事実によって支持されているとすれば，ピアスンの予言に反対する唯一の議論となるわけです。ところが，不幸にして，事実はどうも反対であるらしい。シナは自分の，三つのそれぞれ異った気候地帯から，流れのように移住民を送りだすことができます。それでシナ人は，シンガポールへも，シベリヤへも，押しよせます。私は西印度の到るところでシナ人を見ました。ある島島では，小売店はみな，彼等の手に移りかけていました。彼等は，カナダから，南チリーまで，大平洋沿岸に移住しています。パナマだけは，彼等にとって気候が苦手であったが。西印度の黒人も，そこでは倒れました。シナ人よりも早く。と。

在熊時代のハーンの日常生活時間表

1893年（明治26年）10月11日。同教授へ。

別に申し上げることもないが，手紙をさし上げるべき時期と考えます。私の一日の行事を見本として書いてみましょう。これは誰にも書く考えはないが，君になら書いてならないわけはないから。

午前六時――小さいめざましが鳴る。妻が起きて私を起す。昔のサムライ時代の真面目な挨拶(あいさつ)

で、私は起きて坐る。ふとんのわきへ，火種の消えたことがない火鉢を引き寄せて，煙草を吸い始める。女中たちが入ってきて平伏して，旦那様に〝お早うございます〟と言って，それから戸をあけ始める。そのうちに他の部屋では，小さい灯明が先祖の位牌と，仏様（神道の神様ではない）の前にともされて，おつとめが始まり，先祖へお供えをする。（精霊は供えてある物を食べないでその精気を少し吸うのだそうです。それでその供えものは，極めて少しづつです）。もう既に，老人たちは庭へ出て，朝日をおがみ，手を拍って出雲の祈禱をつぶやいている。私は煙草をやめて縁側へ出て顔を洗う。

午前七時――朝食。極めて軽いもの。卵と焼きパン。ウイスキーの小さじ一ぱいを入れたレモナードと黒コーヒー。妻が給仕する。私は妻にも少し食べさせようとする。しかし，妻は少ししか食べない。あとで一同の朝食の時にも顔を出さなければならないので。それから，車夫がくる。私が洋服を着始める。初のうちは，妻が，順序よく一品ずつ渡して，ポケットに気をつけてくれたりする日本の習慣は嫌いでした。これは人を怠惰にすると思いました。しかし，それに反対しようとすると，人の感情を害してしまって面白くないから。それで古い習慣におとなしく従っています。

年前七時半――一同が玄関で〝さようなら〟を言うため集まる。しかし，女中たちは外に立つ。主人が洋服の時は，女中たちは立っていると言う新しい習慣によるのです。私はシガーに火をつける。私に向って伸ばされた手にキッスする（それだけが舶来の習慣）それから学校へ行く。

（四五時間あけて）

車夫の呼び声で帰ると，一同前と同じく〝お帰りなさい〟と挨拶しに玄関に来る。それから，手傳されるままになって，洋服をぬいで着物，帯などに着替える。座ぶとんと火鉢が用意してある。チェンバレンさん，メースンさんから手紙が来ている。昼食。他の人たちは，私がすんだ後に食事をする。隠居は二人あるが，私は稼ぐ人だから，一家を支えていく人のことは第一に考えなければならないという主義によるものです。しかし，他の場合には，第一位ではない。たとえば，一同集まる時には，名誉の地位は，年令と親子の関係でいつもきまる。その時は，私は第四番目の席に，妻は第五番目の席につく。その時，老人はいつでも第一番にもてなされる。食事時は，妄りに他の人たちや，女中を妨げないことに一種の了解がある。規則ではないが，この習慣を私は尊重する。それで，私は一同がすまないうちは，妄りにその方へは行かない。それから，銘銘が好きな場所についても一種の礼法がある。それも厳重に守られる。

午后三時四時――非常に暑い時には，みな昼寝をする。女中たちも交替に眠る。涼しくて気持がよければ，一同働く。女は裁縫。男は庭のそこここで，色色のこまごました作業をする。子供たちが遊びに来る。朝日新聞が来る。

午后六時――入浴時間。

午后六時半から七時半――夕食

午后八時――一同箱火鉢を囲んで，朝日新聞を読むのを聞く。或は話をする。時に新聞が来な

い日がある。そんな時には，珍しい遊戯をする。それには女中も加わる。母は合間(あいま)に針仕事をする。ある遊戯は甚だ奇抜です。一すじの糸で大きな輪をつくり，短い糸でまた小さい輪や，小さな紙きれを用意する。それから大きな輪を，ビロードの座ぶとんの上に置いて，お多福の顔の輪郭とする。それから眼かくしして，その輪の中に顔の他の部分を作るように，小さな輪や小紙片を置かねばならない。ところで，これがなかなか，むずかしい。そして失敗するたびに，非常におかしいのです。しかし，非常によい晩には，私たちは時時外出します。女中を交替に連れ出して，外出の機会を与えてやります。時には芝居に行くこともある。時には来客がある。しかし一番愉快なことは，夜ランプがついた店で，何か変った，又はきれいな掘り出しものをして来ることです。そんな時には，大得意で持ち帰り，一同は感心して見る。しかし，私だけは，晩には大概は，書きものすることにしています。私のお客で大切な人の場合なら，妻だけが出て，他の者はその人が帰るまで出ないようにする。そして妻が接持します。普通の客なら，女中まかせです。

夜がふけると，神様の世界になる。昼間は，神様は，ただ普通の供物を受けるのですが，夜になると，特別の祈禱を受ける。小さい灯明をつけて，私を除いて，うちの者は，交替で礼拝する。この祈禱は立ったままでするが，仏へのおつとめは跪(ひざまづ)いてする。私はただ一度，祈禱をするように言われました。それは，うちに心配なことがあった時でした。その時は，教えられた通りに，一言一句，日本語をくりかえして，神神に祈りました。神棚の灯明は消えてなくなるままにしてある。寝る合図をするのが私の役目で，一同それを待っている。書くことに心を奪われて時間を忘れることがある。そうすると，余り勉強が過ぎないかと注意される。女中は部屋部屋へ，ふとんを拡げる。火鉢に火をおこしなおして，私とその他の男たちが，夜，勝手に煙草を吸えるようにする。それから，女中たちは平伏して，"おやすみなさい"と言う。それから，全く静かになる。

時時，眠りにつくまで読書する。時には鉛筆をもって，床の中で書きつづけることがあります。しかし，いつでも，昔の習慣に従って，妻は，"お先にご免蒙(こうむ)ります"と言う。そんな礼儀は，余りに謙遜過ぎるから，やめさせようと試みたが，結局，美しい習慣で，魂の中にしみ込んでいるから，止めさせることはできません。これが日常生活の概略です。それから就寝します。

密集居住地での，孤影悄然の人ハーンの，談論風発的サロン――書簡ア・ラ・カルト

日本事物誌（筆者注：Basil Hall Chamberlain 著。原名 "Things Japanese."。日本に関係がある事物を，アルファベット順に配列し，事典風に解説を付したもの。初版は1890年(明治23年)）のある部分を，先日読みかえしているうちに，家庭での沐浴について，ご存知ないことを私から申し上げることができると思いました。勿論それは，ただの思いつきです。君が言われる通り，一家内の人人は，長幼の順序で，同じ湯を使用することは事実です。しかし，この事実だけを述べたのでは，欧州の読者を誤解させるかも知れません。こんな場合の法則を書いておくだけの価値があります。銘銘が風呂の外で洗って，それからその風呂桶に入る前に，金盥(かなだらい)なり，何か他の容器なりで，湯を汲み取って，十分に全身を洗い清めます。それだから，この法則が守られている家庭においては，最後に入浴する女中でも，最初に入浴する隠居と，殆んど同様なきれいな湯

に入るのです。本当に洗うのは，浴槽の中ではない。それから，ある浴場——杵築の如き——では，この法則は，数百人の人によって，厳重に守られているのを実見しました。勿論貧しい階級では，それほどきれいではありません。

私の手紙は，私自身の，心の動揺を示しているが，また錯覚と，錯覚脱出の記録です。君の著述に引用してあるアミエル（筆者注：Henri Frédéric Amiel。スイスの文学者で30年間に書きつづけた日記で有名1821～1881）は私たちの友人メースンのように，著述はしないで，日記だけ書いた。そこで私もそんな風に待っていたら，結局書けなくなったでしょう。幸に，私には少なくとも二人の寛大な読者があるつもりです。

私は昨日〝日本事物誌〟の中で，扇に関するところを見ているうちに君は「恐らく宗教を除いて」すべてのことが，扇に取り扱ってあると言っています。この「恐らく」で助かっているが昨年夏，私は扇にたくさんの題目——鳥居，お宮，祭，その他色色のもの——を見ました。それから，福助の肥った姿を描いた扇をたくさん見ました。しかし，私が暗示したい必要な点は，宗教的な扇は，それだけで甚だ著しい階級を作っている事実です。殆んどすべての寺は，その神聖な場所の絵のある扇をくれます。お札や，その他の尊い珍しいものに関する著書には，特別にこのことを記すだけの価値がありましょう。

天保の人の方が，現在の大学教育を受けた人人よりも，頭脳が大きいと私が考えるのは，正しいでしょうか，どうでしょう。とにかく，最も高い教育を受けた日本人は，何でも，ある問題について考えるとなると，気の毒なように小さく見えます。その人達の話は，14，5才の少年のようです。問題の要領をつかむこともなく，物の関係の概念ももたない。この人たちと話をすることは全く不可能です。ところで，私が遇っている老人たちは，もっと立派な人人でした。考えの範囲は狭いが，私が通訳によって推量するところでは，徹底的に，独創的に，よく考えます。その人たちの話では，啓発されます。私が今接している人たちは，何の考えももっていない。これまでの勉強で，頭脳は，焼いた胡桃の心のように，縮み上がっしまったようです。何か言っても，ただ無味乾燥なむだ話だけ。生れたての赤坊でも知っているべきことに対して，のべつ幕なしの質問。そのくせ月のように高い自惚れと，自分たちが十九世紀の学問を残らず征服したという犯し難い自信。それから，外国人などは，一種の愚かな家来のようなもので，本当の人間として取り扱うべきものでないという信仰をもっています。

著述家としての君自身に関するお話は，ただ一時的なものでしょう。と私は信じます。八九万マイルの旅行のあとで，当然あるべき疲労でしょう。いつもそんな風ではなかろうと信じます。しかし君は，少なくとも半年間は，十分に休養して，できるだけ愉快に，我儘にしているのがよ

いと信じます。実際，長途の旅行のあとで，こうするのが，自然の法則です。それから著述はその後で，かえってよくなります。西印度の暑熱の中では，記憶力も何も時としてなくなることがあります。そこで，私は友人に『私は書けない。死んでしまいたい』と言いました。実際私は非常に悲観したのです。彼（医者で著述家）は言いました。『書こうなどとしない方がよい。田舎へ行って，小説を読み，水浴をなさい。ここでは，皆そんな風になります。それは，休養して，何か遊びごとをするようにという，自然の警告です』私は，この人の説が正しいことが分ったから，それから先は努力をやめました。勿論肉体的活力が弱っている時は，継続的精神力は，弱くなるに相違ありません。両方の力の貯えは，同じであるという道理になります。神経の電池は，徐徐に満ちるようにして置かねばなりません。そして満ちるには，長時間を要します。私の場合では，一度，つめ替えるのには，数年かかりました。しかし私は，それと年齢とは，何の関係もないと思います。私は三十の時より，今の方が，遙かに強壮です。ただ違うのは，十年ごとに，回復する時間が長くかかることです。

ついでですが，今日6月27日で私は47才です。もう何年著述ができるでしょう。少なくとも，20年やりたいのですが，ただ材料がほしいのですよ。そして，君も，もしこの金棒引の忠告を聞いて，半年或はせめて三ケ月も，一切の著述を忘れてしまわれたら，たしかに又そんな気になりましょう。それから，私がもし君であったら，我儘をしますね。よい消化は，何事も可能であることを意味します。『それさえあれば，いつでも回復できる』と昔，フランスの忠告者が言いました。もし私が君だったら，私はその消化力に，赤ぶどう酒と，ビーフと，プッディングと，パイと，リキュルをもって行って，沢山の用を命じます。それから，葉巻を吸って，ブランディを飲みましょう。

ハーンの少年時代
中部イングランドのダラム（Durham）のセント・カスバート・カレッヂ，アショウ（Saint Cuthbert College, Ushaw）
通称アショウ・カレッヂ学籍簿から。当時13才。

ハーンの青年時代
シンシナティ・インクワイアラ社へ記者として入社一年前。当時23才。

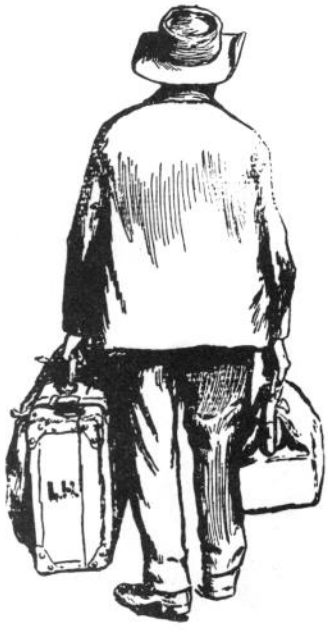
上のもの：在米の若い親友エルウッド・ヘンドリック
1861年ニューヨーク州オルバニー
（Albary）生れ。　当時29才。
下のもの：東京文科大学教授後に各誉教授
ベーズル・ホール・チェンバレン
（Basil Hall Chamberlain）
1850年英国南海岸ポーツマス（Portsmouth）生れ。　当時57才。

それから，著述をしなければ幸福に生きていられない程，絶対に必要な程度に，回復してくる元気の剰余ただそれだけが出てくるまでは，著述のことなど考えもしないでしょう。勿論これは私自身の経験のくりかえしに過ぎない。君にとっては，恐らく無駄ごとかも知れません。しかし君は，もっと滋養物をとられた方がよい結果を得られると思うが，それをしないのではないかと，私は疑います。私がそう考えるのは，君が私と食事をする時には，ご馳走を食べるが，一人の時には少ししか食べない習慣だと言われたからです。恐らく学者はみなそうです。しかし私は暫（しばら）くは，体をつくるようにされることを願います。恐らくどの医者も君にこんなことを言ったものはないでしょう。しかし，私自身の経験では，人は，胃の消化力を科学的に三倍にすることができるという奇妙な事実があります。それはその人の体力の貯えを三倍にすることになります。私は君に珍しいことを告げられるのだが，退屈だろうかと思います。しかし，君が元気がないと言われるから心配のあまり，こんなことを申し上げるのです。それで医者にも見はなされて，一日に，なま卵一つしか食べられなかったあとで，再び元気をつけてくれた最大の看護婦・自然の話をしたのです。

その詩の中で"王のような少年"と巧みにも名づけた少年が，世界の仕事をするあの驚くべき事実を，キップリング（Rudyard Kipling）だけが，それを捉えて明るみへ引き出しました。英国を除いて，どの他の国が，こんな少年を生ずるか私は疑います。そ

ハーンが手なぐさみに描いた鉛筆画

してとにかく他の国ではそんな少年に対して，職業を見出すことはできないでしょう。クライブ（筆者注：Robert Clive。イギリスの政治家，軍人。東印度会社書記として渡印。1755年，ベンガル太守およびフランスの連合軍を，プラッシーに破って，イギリスの印度支配の基礎を固めた。1725～1774）をつくったのと同じ学校制度の結果です。英国の教育制度に反対した色色の説があるが――野獣的だ。薄情だ。という非難はあるが――そのでき上がったものは，動かすべからざる鉄のような事実を与えています。勿論，人種ということを考慮に入れねばならないが，他のどんな人種も，こんな制度を持ちません。それは人間を征服する方法として，子供の時から，自己を征服する訓練です。それだから，1 9（ママ）の少年でも，いざといえば，インド帝国を支配することができます。人生において，主に必要なことは賢い戦闘力であるとすれば，こんな訓練は立派でもあり又価値もあります。しかし，きまって，それは偉大な頭脳をつくることはない。如何でしょう。それには，もっと穏（おだ）やかな中庸が必要です。私は，この世紀における，力の崇拝に全然同情はしない。君は，どうですか。沈思黙考の最高の問題では確にないが，それは全ての芸術に価する華美な光景を見せます。



1890年3月ハーンが日本へ向って出発した時同行した挿絵画家 C.D. ウェルドンが描いたもの。
構えた正面像よりも，無防備の後姿が，その人の〝精神〟をより正直に現わすと思うが，それならば，このスケッチから，永遠の巡礼者の寂寥感が汲みとれはしないであろうか。

以上ハーンから，チェンバレン教授宛の手紙の種種相の一斑を紹介した。前に述べた通り，ハーンの手紙は，一通が大変長いものであるため，上記数例は長短いずれも，ごく一小部分を採録したに過ぎない。この両人は，文字通りの知己の間柄で，二人とも1850年（嘉永3年）生れである。お互の間に頻繁な書簡の交換があった。渡辺沢身氏によれば『チェンバレン長年の秘書であった人シャール・ボラール・タルベールから，チェンバレンに宛てた書簡約200通を割愛され，1937年に日本にもちかえった。その中には，ラフカディオ・ハーンの書面62通があり，これを一括した紙包の上には，チェンバレンの自筆で〝1890年――5年バジル・ホール・チェンバレンに対するラフカディオ・ハーンの手紙〟と表書きして保存してあった。これらの書簡は，市川三喜，佐々木信網両博士らの肝入りで，東洋文庫に納められ，幸に戦禍を免れて現存している』と。彼らはこれらの書簡を通じて，各自の意見を発表し，賛成，反対，思索，教示，論駁するなどの知的活動を展開したり，日常の話題報告などを継続していったのである。ハーンは前述のように『私の手紙は，錯覚とそれからの脱出の記録である』と謙遜し，また別の手紙の中で『友人とは，それへ，

われわれの邪推のすべてを語ることができる人である。という，ある日本人生徒が下した定義は，どうですか』。と書き，生徒に托して，普段，憂さの捨所になってくれていることに感謝し詫びてもいる。ハーンは相手方に，熱心に訴えもした。『つまらぬ手紙だとお思いになっていますが，あなたが一般につまらぬとお思いになるものに，私は，並並ならぬ面白味を発見しています。あなたの，あの急いでお書きになる短いお手紙には，私の心に深く泌み入る濃縮された透徹した観察が沢山あります。それは，日数が多く経過すると，ともすれば，私のある随筆の中に再び姿をあらわします。その時分には，もう私自身の思想の一部分になってしまっていて〝私の〟と〝あなたの〟との間に境界線を引くことが困難になります。勿論あなたのお手紙を，こんな風に感じるには，この国に長い間暮した上のことでなければなりません。と。相手方の影響の大きなことを認めてこれを高く評価している。同行二人的なこの親友たちはお互に強烈な反応を示しつつ相互受益の度を高めて行ったのである。まるで一組の共棲動物である。序ながらハーンは生前，平均一割以上の印税を得たことがなかった。中には僅か七分五厘というのもあった。彼は，この種のことは全く書店まかせであった。美人が自分では，その美人度の評価が不可能であろうように，彼は作家としての自己の，従ってその著作品の，価値判断には盲目であったという原因からでもあろうか。出版業者から搾取されつづけていた。その証拠に彼の没後の書簡集などは，親友マクドナルド（駐日米海軍主計少将）の力添えで一挙に二倍以上の印税になったとのことである。彼が愛弟子たちに，優れた文学上の才能をもっていても，実際的職業を持って先ず生活の安定を得ることの必要性を力説しているのは，彼自身の深刻な体験に基づいたものであった。ハーンは極めて優れた文芸批評家であったが，自分自身の作品については本当に，前述の通り盲目であったのであろうか。窓外に，鎮守の森の蟬時雨の声を耳にしつつ，筆者はそのことを今不思議に思っている。

参　考　文　献

小泉八雲全集（第一書房）　　広瀬朝光著：小泉八雲論　　雑誌へるん
平井呈一訳：小泉八雲作品集　　明治村通信

硯　　滴　（小　泉　八　雲　英　訳　七　首）

胸に包めぬうれしいことは，
口止めしながら，ふれ歩く。
I cannot hide in my heart the happy knowledge that fills it ;
Asking each not to tell, I spread the news all around.

言いたい愚痴さえ顔見りゃ消えて，
とかく涙が先に出る。
Seeing the face, at once the folly I wanted to utter
All melts out of my thought, and somehow the tears come first !

惚れたわいなと，すこしのことが，
なぜにこのように言いにくい。
Such a little word !—only to say, "I love you !"
Why, oh, who do I find it hard to say like this ?

逢うた昔は命もいらぬ,
　添うた今では千代までも。
The person who said before, "I hate my life since I saw you",
Now after union prays to live for a thousand years.
　惚れて通えば千里も一里,
　逢えなきゃ一里が千里にも。
Going to see the beloved, a thousand ri are as one ri ;
Returning without having seen, one ri is a thousand ri.
　あかるいランプや電灯さえも,
　恋の闇路は照らしゃせぬ。
Even the brightest lamp, even the light electric,
Cannot lighten at all the dusk of the Way of Love.
　世間こぞって好かない主を,
　なぜにこのように好くのやら。
You, by all others disliked !—Oh, why must my heart thus like you ?

（　未　　完　）